

・ 診断名

(1) 感冒症状

感冒症状を訴えた対象者 258 人のうち、最も多かった診断名は、インフルエンザ 95 人 (36.8%) であり、次いで感冒 (咽頭炎、気管支炎、上気道炎、扁桃炎および風邪を含む) 57 人 (22.1%) であった (表 26)。また、OTC 薬使用者 (N=146) のうち、最も多かった診断名は、インフルエンザ 59 人 (40.4%) であり、次いで感冒 34 人 (23.3%) であった (表 27)。

表 26 感冒症状を訴えた対象者の診断名 (N=258)

	対象者数(人)	割合 (%)
インフルエンザ	95	36.8
感冒*	57	22.1
鼻炎	3	1.2
肺炎	20	7.8
肺気腫	1	0.4
頭痛	1	0.4
胃炎・細菌性胃腸炎	6	2.3
食道潰瘍	1	0.4
腎疾患**	5	1.9
膠原病	3	1.2
意識消失	1	0.4
その他***	12	4.7
傷病名なし	53	20.5

*咽頭炎、気管支炎、上気道炎、扁桃炎、風邪を含む

**腎不全、腎盂腎炎、ネフローゼ症候群

***気管支喘息 1、サイトメガロウイルス 1、意識消失発作 1、感染症疑い 1、肝障害 1、胸水症 1、左耳管狭窄症 1、糖尿病性ケトアシドーシス 1、敗血症 1、不明熱 1、便秘症 1、良性発作性頭位めまい症 1

表 27 感冒症状を訴えた OTC 薬使用者の診断名 (N=146)

	対象者数(人)	割合 (%)
インフルエンザ	59	40.4
感冒*	34	23.3
鼻炎	1	0.7
肺炎	11	7.5
肺気腫	1	0.7
胃炎・細菌性胃腸炎	3	2.1
食道潰瘍	1	0.7
腎疾患**	1	0.7
膠原病	1	0.7
意識消失	1	0.7
傷病名なし	33	22.6

*咽頭炎、気管支炎、上気道炎、扁桃炎、風邪を含む

**ネフローゼ症候群

インフルエンザ患者 95 人のうち、59 人 (62.1%) が受診前に OTC 薬を使用しており、そのうち、30.5%が受診時にインフルエンザ様症状を訴えていた(表 28、29)。また、インフルエンザ患者かつ受診前に OTC 薬を使用した 59 人のうち、症状発現してから 2 日以内に受診した者は、34 人 (57.7%) であった(表 30)。

表 28 インフルエンザ患者の OTC 薬使用状況 (N=95)

インフルエンザ診断あり	
N=95	
OTC 薬使用あり (%)	59 (62.1)
OTC 薬 (%)	57 (60.0)
処方薬と OTC 薬 (%)	2 (2.1)
OTC 薬使用なし (%)	36 (37.9)
処方薬 (%)	20 (21.1)
使用なし (%)	16 (16.8)

表 29 OTC 薬使用者のインフルエンザ様症状の有無 (N=59)

	対象者 (人)	割合 (%)
インフルエンザ様症状 ⁷⁾		
症状あり	18	30.5
症状なし	41	69.5

インフルエンザ様症状;38℃を超える発熱、上気道炎症状、全身倦怠感等の全身症状、これら3症状全てを満たす者とした⁷⁾。

表 30 OTC 薬使用者の受診までの日数 (N=59)

	対象者数 (人)	割合 (%)
2 日以内	34	57.7
2 日以上	25	42.3

(2) 消化器症状

消化器症状を訴えた対象者 132 人のうち、最も多かった診断名は、胃炎・腸炎・胃腸炎 44 人 (33.3%) であり、次いで胃・十二指腸潰瘍 20 人 (15.2%) であった (表 31)。また、OTC 薬使用者 (N=61) のうち、最も多かった診断名は、胃炎・腸炎・胃腸炎 27 人 (44.3%) であり、次いで胃・十二指腸潰瘍 10 人 (16.4%) であった (表 32)。なお、OTC 薬長期使用者 (N=13) には、胃がん、胃潰瘍、出血性腸炎の者がいた (表 33)。

表 31 消化器症状を訴えた対象者の診断名 (N=132)

	対象者数(人)	割合 (%)
胃炎・腸炎・胃腸炎*	44	33.3
過敏性腸症候群	2	1.5
逆流性食道炎	2	1.5
胃・十二指腸潰瘍	20	15.2
胃・大腸ポリープ	4	3.0
膵炎	3	2.3
胃がん・大腸がん・膵臓がん	12	9.1
卵巣のう腫	1	0.8
尿路・総胆管結石	2	1.5
腹痛	3	2.3
憩室炎	2	1.5
虫垂炎	3	2.3
甲状腺種	2	1.5
急性腹症	1	0.8
下痢症	1	0.8
腎炎	1	0.8
感冒	6	4.5
インフルエンザ	5	3.8
傷病名なし	18	13.6

*出血性腸炎含む

表 32 消化器症状を訴えた OTC 薬使用者の診断名 (N=61)

	対象者数(人)	割合 (%)
胃炎・腸炎・胃腸炎*	27	44.3
過敏性腸症候群	1	1.6
逆流性食道炎	1	1.6
胃・十二指腸潰瘍	10	16.4
胃・大腸ポリープ	1	1.6
膵炎	2	3.3
胃がん・膵臓がん	5	8.2
総胆管結石	1	1.6
腹痛	1	1.6
憩室炎	2	3.3
虫垂炎	1	1.6
下痢症	1	1.6
感冒	2	3.3
インフルエンザ	2	3.3
傷病名なし	4	6.6

*出血性腸炎含む

表 33 OTC 薬長期使用者の診断名および使用期間 (N=13)

診断名	使用期間	使用頻度(1ヶ月あたりの 使用日数)
インフルエンザ	数年	6
胃ポリープ症	1ヵ月	症状に応じて
胃がん	数年	10
胃潰瘍	数年	30
逆流性食道炎	6ヵ月	30
急性胃炎	1年	症状に応じて
感冒	6ヵ月	3
胸部痛	6ヵ月	20
出血性腸炎	数年	30
感冒	数年	3
慢性胃炎	1ヵ月	30
胃がん	8ヵ月	5
胃潰瘍	1ヵ月	6

(3) 頭痛

頭痛を訴えた対象者 109 人のうち、最も多かった診断名は、頭痛・緊張性頭痛 27 人 (24.8%) であり、次いで感冒 24 人 (22.0%) であった (表 34)。また、OTC 薬使用者 (N=55) のうち、最も多かった診断名は、頭痛・緊張性頭痛 13 人 (23.6%)、感冒 13 人 (23.6%) であった (表 35)。なお、OTC 薬長期使用者 (N=13) には、片頭痛、頭蓋内占拠性病変の者がいた (表 36)。

表 34 頭痛を訴えた対象者の診断名 (N=109)

	対象者数(人)	割合 (%)
頭痛・緊張性頭痛	27	24.8
片頭痛	4	3.7
頭蓋内占拠性病変	2	1.8
脳出血	1	0.9
くも膜下出血	1	0.9
外傷性くも膜下出血	1	0.9
急性感染性胃腸炎	1	0.9
左頭蓋窩くも膜のう胞	1	0.9
心身症	1	0.9
髄膜炎	1	0.9
前交通動脈瘤	1	0.9
低髄圧症候群	1	0.9
脳梗塞症	1	0.9
脳腫瘍	1	0.9
慢性副鼻腔増悪	1	0.9
めまい症	2	1.8
失神	1	0.9
インフルエンザ	13	11.9
感冒	24	22.0
高血圧症	2	1.8
その他*	15	13.8
傷病名なし	7	6.4

*うつ状態 2、オーム病 1、胃潰瘍 1、鉄欠乏製貧血 1、甲状腺腫 2、心弁膜症 1、耐糖能障害 1、大腸癌 1、蛋白尿 1、肺がん 1、肺血栓密栓症 1、慢性関節リウマチ 1、高眼圧症 1

表 35 頭痛を訴えた OTC 薬使用者の診断名 (N=55)

	対象者数(人)	割合(%)
頭痛・緊張性頭痛	13	23.6
片頭痛	3	5.5
頭蓋内占拠性病変	1	1.8
くも膜下出血	1	1.8
外傷性くも膜下出血	1	1.8
左頭蓋窩くも膜のう胞	1	1.8
心身症	1	1.8
脳腫瘍	1	1.8
髄膜炎	1	1.8
インフルエンザ	9	16.4
感冒	13	23.6
高血圧症	1	1.8
その他*	6	10.9
傷病名なし	3	5.5

*うつ状態 1、オーム病 1、胃潰瘍 1、甲状腺腫 1、
大腸癌 1、蛋白尿 1

表 36 OTC 薬長期使用者の診断名 (N=13)

診断名	使用期間	使用頻度(1ヶ月あたりの 使用回数)
片頭痛	1ヵ月	30
診断名なし	1ヵ月	27
感冒	数年	5
感冒	6ヵ月	2
頭蓋内占拠性病変	1年	2
インフルエンザ	4年	5
頭痛	20年	18
頭痛	1年	3
緊張性頭痛	3ヵ月	2
緊張性頭痛	10年	3
頭痛	数	—
蛋白尿	6年	0.3
左頭蓋窩くも膜のう胞	3ヵ月	5

考察：

・対象者の背景

対象者の背景では、3 症状間において、性別、年齢、職業、同居人の有無、居住地区について 3 症状間で統計学的有意差はみられなかった。ゆえに、後述する OTC 薬の使用状況等についての 3 症状間の比較では、性別、年齢、職業、同居人の有無、居住地区による影響はないと考えた。

・受診前の OTC 薬の使用状況

3 症状に対する受診前の OTC 薬使用率は、それぞれ感冒症状 56.5%、消化器症状 46.2%、頭痛 50.4%であり、3 症状間で統計学的な有意差は見られなかった。しかしながら、慢性症状である消化器症状、再発を繰り返すことの多い頭痛に比べ、急性疾患である感冒症状に対する OTC 薬使用率は高い傾向にあった。また、受診前に OTC 薬を使用した理由として、「普段、OTC 薬を使用するため」と回答した者の割合が、感冒症状では、消化器症状、頭痛の 2 倍以上であった。さらに、これまでに JETRO が、消費生活アドバイザーに対して行った意識調査²⁾においても、主に利用する OTC 薬として、「かぜ薬」が最も高く、次いで「胃腸薬」、「頭痛薬」であり、本調査の結果と同様であった。このことから、医療機関を受診した消費者の約半数が受診前に OTC 薬を使用し、症状別に見ると消化器症状、頭痛に比べ、感冒症状に対して、より OTC 薬が使用されることが明らかとなった。

・使用した OTC 薬の種類（薬効群別）

最も使用されていた OTC 薬の薬効群は、OTC 薬を使用した者（N=262；感冒症状 146 人、消化器症状 61 人、頭痛 55 人）のうち、感冒症状では「かぜ薬」（70.5%）、消化器症状では「胃腸薬」（91.8%）、頭痛では「解熱鎮痛薬」（69.1%）であり、3 症状間で違いが見られた。このことから、消費者は、症状に該当する薬効群をもつ OTC 薬を主に使用していることが明らかとなった。

・使用した OTC 薬の種類（入手方法別；新購入薬、常備薬）

使用した OTC 薬の種類では、3 症状いずれにおいても、「新購入薬」に比べ、「常備薬」の割合が高かった。また、急性症状で見られる感冒症状に比べ、慢性症状の多い消化器症状や再発を繰り返すことの多い頭痛では、さらに「常備薬」の割合が高かった。このことから、消費者は、特に消化器症状および頭痛のような繰り返し発現する症状に対する OTC 薬を家に常備する傾向があると考えられる。

新購入薬使用者における OTC 薬購入先では、3 症状いずれにおいても、「薬局」に比べ、「薬店・ドラッグストア」の割合が高かった。「薬店・ドラッグストア」

は、OTC 薬の購入先として、消費者に広く利用されていることが明らかとなった。

・ OTC 薬購入時の情報提供

OTC 薬購入者の約半数が、購入前に外箱の説明を読んでいなかった。また、項目別に見ると、購入前に外箱の説明を読んだ者のうち、「効能・効果」、「用法・用量」を約 70～90%の人が読んでいるのに対し、「使用上の注意」、「成分・分量」がほとんど読まれていないことが明らかとなった。したがって、OTC 薬の製品情報のうち特に「使用上の注意」に関する情報が、消費者に正しく伝わっていない可能性があると考えられる。この原因としては、OTC 薬購入時において、消費者は、「効能・効果」、「用法・用量」に関心がある一方、「使用上の注意」、「成分・分量」には、あまり関心のないことおよび現行の外箱の説明の記載方法の問題点も考えられる。そこで、OTC 薬を適切に選択する上で、特に「使用上の注意」の重要性を啓発するとともに、今後、多くの消費者に「使用上の注意」を読んでもらえるような外箱の説明の記載方法を検討する必要がある。一方、米国において NCPIE (the National Council on Patient Information and Education) が、消費者に対して行った意識調査 (N=1,011)⁸⁾ においては、OTC 薬購入者の約 95% が、購入時に外箱の説明を読んでおり、項目別に見ると最も読まれていたのは「用法・用量」35%であり、次いで「成分・分量」34%、「使用上の注意」21%、「効能・効果」12%であった。これは、本調査の結果と大きく異なっていた。米国では外箱情報が添付文書を兼ねている点で日本とは異なるが、これを踏まえても、日本の消費者と米国の消費者の OTC 薬に対する意識には大きな隔たりがあると考えられる。

新購入薬使用者のうち、約 60%は販売者からの説明を受けなかった。主な理由としては、「購入薬を決めていたから」、「使用（相談）したことがある薬だったから」であった。これらの結果は、これまでに行われた消費者アンケート調査⁹⁾（平成 17 年 4 月 15 日、第 12 回厚生科学審議会医薬品販売制度改正検討部会資料 3-1）と一致している。これらのことは、購入時の販売者の積極的な関与や購入者に対する情報収集の必要性などを啓発する対策を講じることの必要性と、副作用情報等の新たな情報が追記された時にはこれらが伝わる工夫の必要性を示している。

・ OTC 薬使用前の相談状況（常備薬使用者のみ）

常備薬使用者の約 30%は、OTC 薬使用前に相談していた。また、相談相手別に見ると最も多かったのは、「友人・家族」（72.1%）であり、「薬剤師・販売員」および「医師」を合わせても医薬の専門家への相談は、30%未満であった。これらのことから、常備薬については医薬の専門家が関わることもであるが、自己

管理が可能になるよう外箱表示や添付文書情報の充実を図る必要性も示している。なお、今回の結果は、日本大衆薬工業協会が実施した「第 27 回消費者意識調査」¹⁰⁾では、OTC 薬を使用する場合の消費者の相談先として、「薬局・薬店」が 88.8%と最も多く、次いで「製薬企業」、「公共の相談窓口」であった。この結果は、本調査結果と大きく異なる。この原因としては、「第 27 回消費者意識調査」の対象者は新聞・インターネットで募集され、その結果、OTC 薬に関心の高い消費者に偏っていたことが考えられる。

・OTC 薬使用前の添付文書等の確認状況

3 症状いずれにおいても OTC 薬使用者において、使用前に最も読まれていた情報源は、外箱の説明 (79%) であり、項目別に見ると「相談すること」がほとんど読まれていなかった。この原因としては、「相談すること」が添付文書にしか記載されていないことおよび「相談すること」に対する消費者の認識不足が考えられる。そこで、添付文書だけでなく、外箱の説明にも「相談すること」を記載する必要がある。また、消費者に「相談すること」が認識されるような記載方法を検討する必要もある。

・OTC 薬の適正使用状況 [用法・用量、服用日数・服用回数]

適正使用状況については、OTC 薬使用者の 10~20%が、定められた「用法・用量」、「服用日数・回数」をそれぞれ遵守しなかったと回答した。一方、米国では NCPIC (the National Council on Patient Information and Education) により、2001 年と 2003 年に消費者調査⁸⁾が行われ、定められた「用法・用量」を遵守しなかった者の各年の割合は、33%、48%と報告されている。これは、本調査結果の 2~4 倍であり、米国において、OTC 薬を不適正に使用する消費者の割合が高いことが明らかとなった。この原因として、日本と米国の OTC 薬の販売制度の違いが考えられる。日本では、薬事法において OTC 薬を販売するには店舗ごとに都道府県知事等の許可が必要であるが、米国では、OTC 薬の販売規制はなく、薬剤師等の一定の知識を有する者の配置も必要とされない。そのため、ドラッグストア、スーパー等での販売の他、通信販売等も認められている。これらのことから、専門家による OTC 薬の適正使用に関する情報の提供の機会は日本よりも米国の方が少ないため、適正使用の不履行者が日本約 3 倍にも上ったものと推測する。いずれにしても用法用量の情報を読んでも遵守しない点については薬に関する啓発活動の必要性があることを示しており、また、服用期間の不遵守については、添付文書等の情報が消費者に確実に伝わっていない点を指摘したものとする。

症状別に見ると、頭痛では、感冒症状、消化器症状に比べ、「用法・用量」を

遵守した者の割合は、約 10%低かった。この原因としては、「用法・用量」における感冒症状、消化器症状に対し主に使用された OTC 薬（かぜ薬、胃腸薬）と頭痛に対し主に使用された OTC 薬（解熱鎮痛薬）の違いが考えられる。すなわち、かぜ薬、胃腸薬では、1 日の服用回数が定まっているが、解熱鎮痛薬の大半では、服用回数に幅がある（但し、製品ごとに定められた 1 日の上限使用回数の範囲内）。このことから、頭痛では症状に応じた消費者自身の判断による服用が行われたため、感冒症状、消化器症状に比べ、「用法・用量」を遵守した者の割合が低くなった可能性がある。

・ OTC 薬の適正使用状況 [OTC 薬使用者の診断名]

1) 感冒症状

感冒症状で、最も多かった診断名は、インフルエンザであり、次いで感冒であった。OTC 薬使用者において、最も多かった診断名も同様であった。また、インフルエンザ患者の約 60%が OTC 薬を使用し、そのうち 40%は症状発現から 48 時間以降（インフルエンザ治療薬であるノイラミニダーゼ阻害薬の奏功する期間を過ぎてから）に医療機関を受診しているなど OTC 薬使用における問題点が明らかとなった。なお、OTC 薬使用者のうち、受診日でもインフルエンザ様症状を呈した人の割合は、約 30%であった。これらの消費者は、インフルエンザ様症状と感冒症状の違いおよびインフルエンザを OTC 薬にて対処するべきでないことを正しく理解していないと考えられる。インフルエンザ様症状を呈した際は、OTC 薬で対処するのではなく、症状発現から 48 時間以内に受診することを、かぜ薬の添付文書等に記載するとともに、OTC 薬販売者は販売時に情報提供を行い、インフルエンザ様症状を呈した者に対し受診勧奨を徹底することなどが求められる。

2) 消化器症状

消化器症状で、最も多かった診断名は、胃炎・腸炎・胃腸炎であり、次いで胃・十二指腸潰瘍であった。OTC 薬使用者において、最も多かった診断名も同様であった。

OTC 薬使用者のうち長期使用者（1 ヶ月以上、繰り返して OTC 薬を使用）の使用期間は、1 ヶ月～数年にわたっていた。また、診断名を見ると、胃がん、胃潰瘍、出血性腸炎など早期に受診すべき人が含まれており、受診前の OTC 薬の長期使用により、治療開始の遅れをもたらした可能性がある。現在、OTC 薬の使用期間に関する添付文書等への記載は、OTC 薬の「相談すること」に、「2 週間位（一部製品では 5～6 日）服用しても症状がよくなる場合」とある。このことから、消費者は OTC 薬を中止するべき時点などの「相談すること」にある記載を認

識していない可能性がある。そこで、消費者に OTC 薬の「相談すること」が認識されるような記載方法を検討する必要がある。また、このような OTC 薬長期使用者に対しては、販売時に受診勧奨する必要がある。しかしながら、以前に使用したことのある OTC 薬を購入する場合、消費者は、販売者の説明を受けない傾向が見られる。こうした人への有用な受診勧奨の方法についても検討する必要がある。

3) 頭痛

頭痛で、最も多かった診断名は、頭痛・緊張性頭痛であり、次いで感冒、インフルエンザであった。感冒、インフルエンザを合わせると約 30%を占めている。これらは、本来、感冒症状の対象者としてエントリーするべき者と考えられる。この原因として、本調査では、対象者の訴える自覚症状を基に各症状に割り付けたことが考えられる。よって、頭痛に対する受診前の OTC 薬使用状況を必ずしも反映していない可能性がある。しかしながら、使用した OTC 薬の薬効分類では、解熱鎮痛薬が最も多く、OTC 薬使用者の約 70%を占めたことから、本調査結果に与える影響は少ないと考えた。また、頭痛に対し OTC 薬を使用した者のうち、頭痛の OTC 薬使用基準⁵⁾を満たした者の割合は、約 20%と低かった。本調査では、医療機関を受診した者を対象としたため、頭痛を訴えた消費者のうち重症であった者に偏っていた可能性があるが、感冒や片頭痛の診断を受けた人の割合が高かったこととも勘案すると、適切な OTC 薬選択が行われていない例もかなり存在する。そこで、添付文書等への記載および OTC 薬の販売時の医薬の専門家の関与を積極的に行う必要があると考える。

4) OTC 薬長期使用者の使用期間

OTC 薬長期使用者の使用期間は、1 ヶ月～数年にわたっていた。また、診断名を見ると、片頭痛、左頭蓋窩くも膜のう胞、頭蓋内占拠性病変など早期に医療機関を受診するべき者が含まれており、受診前の OTC 薬の長期使用により、治療開始の遅れをもたらした可能性がある。現在、OTC 薬の使用回数に関する添付文書等への記載は、OTC 薬の「相談すること」に、「5～6 回服用しても症状がよくなる場合」とある。このことから、消費者は OTC 薬を中止するべき時点などの「相談すること」にある記載を認識していない可能性がある。そこで、消費者に OTC 薬の「相談すること」が認識されるような記載方法を検討する必要がある。また、このような OTC 薬長期使用者に対しては、販売時に受診勧奨する必要がある。しかしながら、以前に使用したことのある OTC 薬を購入する場合、消費者は、販売者の説明を受けない傾向が見られる。こうした人への有用な受診勧奨の方法についても検討する必要がある。

・本研究の限界

本研究は都内の2つの大学病院と1つの一般病院において実施した。したがって、全国の地域の受診者の実状を反映していない可能性がある。大学病院受診者と一般病院受診者については外来患者においてはアンケート結果に大きな差はなかったが、1つの大学病院で入院患者を対象に調査を行ったが、この点については、外来患者に比べて診断名の重症度が高い例が多いことから、OTC薬の適用が相応しくない患者を多く抽出した可能性がある。また、入院患者においてはOTC薬購入時の実態が正確に把握できていない場合もあると考えられる点に配慮して本結果を利用する必要がある。

まとめ：

OTC薬の使用実態を把握し問題点を抽出することを目的に、感冒症状、消化器症状、頭痛のいずれかを訴え受診した患者において、受診前の一般用医薬品（OTC薬）の使用状況、使用前の添付文書等の確認状況についてアンケート調査を行った。収集された499人（感冒症状258人、消化器症状132人、頭痛109人）の回答について解析した結果、各症状に対する受診前のOTC薬使用率は平均52.5%であり、症状間で有意差は見られなかった。また、OTC薬使用者のうち使用前に添付文書を読んだ者の割合は、60.7%で、「効能効果」「用法用量」は約7割が読んでいたのに対して「相談すること」は17.2%が読んでいたにすぎなかった。適正使用状況については、OTC薬使用者の89.8%が定められた用法・用量を遵守、82.9%が服用日数を遵守したと回答した。なお、感冒症状の258人のうちインフルエンザと診断された者は95人であり、62.1%が受診前にOTC薬を使用していた。OTC薬使用者で消化器症状を訴えていた者の15%が消化性潰瘍、また、頭痛の40%が感冒またはインフルエンザの診断を受けていた。今回の調査から約4割の消費者は添付文書を読まずにOTC薬を使用しており、また、添付文書の「相談すること」がほとんど読まれていないことが明らかとなった。用法用量や服用日数を遵守していない者が1〜2割存在することも判明した。感冒症状を訴えた対象者のうちインフルエンザ患者の半数以上がOTC薬を使用していることなど、OTC薬使用における問題点が明らかとなった。これらの原因には、添付文書等の記載上の問題と消費者の認識不足などが考えられた。

そこで、OTC薬使用における問題点を改善するためには、①外箱情報や添付文書等の効果的な記載方法、②消費者への添付文書等の必読に関する啓発、③OTC薬販売時の情報提供、受診勧奨の徹底などについて今後検討していく必要があると考える。

引用文献：

- 1) 宮地典子, 谷直樹, 片平冽彦. チェーンドラッグストアにおける H2 プロクター配合胃腸薬販売実態調査に関する報告. 社会薬学 1997;16:30-5.
- 2) 平成 12 年度日本貿易振興会・JETRO:「対日アクセス実態調査報告書ー大衆薬ー」
- 3) ファーマウイーク:「2002 年度 薬局・ドラッグストアの薬剤師満足度調査」
- 4) 日本大衆薬工業協会:2005 年「第 30 回大衆薬に関する消費者意識調査」
- 5) 坂井文彦. 平成 14~16 年度厚生労働科学研究;慢性頭痛診療ガイドライン (2005)
- 6) Kahan E et al. Behavior of patients with flu-like symptoms: consultation with physician versus self-treatment. Isr Med Assoc J. ;2(6):421-5. (2000)
- 7) 感染症予防法に基づくインフルエンザ報告基準.
<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/kansensyo/72.html>
- 8) NCPIC (the National Council on Patient Information and Education). Attitude and Beliefs about the use of over-the-counter medicines: a dose of reality. <http://www.bemedwise.org/survey/survey.html>
- 9) 平成 17 年 4 月 15 日第 12 回厚生科学審議会医薬品販売制度改正検討部会. 資料 3-1)
- 10) 日本大衆薬工業協会:2002 年「第 27 回大衆薬に関する消費者意識調査」

医療機関受診前の一般用医薬品の使用実態に関する調査

この度は、「医療機関受診前の一般用医薬品の使用実態に関する調査」にご協力いただきありがとうございます。本アンケート調査の目的は、①かぜ症状で受診された方の受診前の一般用医薬品（市販薬）の使用実態、②市販薬を購入する際の薬剤師の説明状況、③常備薬の使用実態について把握し、一般用医薬品の販売にあたって必要な情報の内容や効果的に情報提供を行う手法を検討することにあります。

***本アンケート調査は、かぜ症状で初めて受診された方を対象としています。**

現在、かぜ症状で、医師の治療を受けている方は、下記を記入せずにご返却下さい。

フリガナ _____

*氏名： _____

*氏名は、傷病名（例：かぜ、インフルエンザ）を特定するためにのみ用います。

アンケート結果の集計作業には、一切利用いたしません。

4) 使用前に薬のラベル(薬の瓶に貼ってある)説明の下記の項目を読みましたか?

あてはまるものすべてを選択して下さい。

1. 注意
2. 効能・効果 (何に効くか)
3. 用法・用量
4. 成分・分量
5. その他 ()
6. 薬にラベルがなかった (薬が瓶に入っていなかった)
7. 読んでいない→(理由: _____)

5) 定められた用法・用量どおりに使用しましたか?

あてはまるものすべてを選択して下さい。

1. はい (定められた用法・用量どおりに使用)
2. 定められた 1 回用量以上を使用→(理由: _____)
3. 定められた 1 日の回数以上使用→(理由: _____)
4. その他 () →(理由: _____)

6) 今の症状に対して使用した市販薬をどのように入手しましたか?

1. 新たに購入→質問 12
2. 常備薬 (家にあった市販薬) →質問 15

問 12 問 11-6)で、「新たに購入」と答えられた方のみお答え下さい。

1) 購入者は?

1. ご本人
2. ご本人以外 ()

2) 購入先は?

1. 薬局 (処方箋も扱っているお店)
2. 薬店・ドラッグストア
3. その他 ()

3) 購入したお店の名前は?

(_____)

4) 購入前に、薬の外箱の説明の下記の項目を読みましたか?

あてはまるものすべてを選択して下さい。

1. 注意・使用上の注意
2. 成分・分量
3. 用法・用量
4. 効能・効果
5. その他 ()
6. 読んでいない→(理由: _____)